

故郷の野草

わたしの故郷は一カ所に止まらない。自分が住んだことのある所は皆故郷である。故郷はわたしにとって何か特別のよしみがあるわけではない。ただそこで釣りをしそこで遊んだという関係で、朝な夕な顔を合せ、そうして知合いになったというだけで、ちょうど村の中の隣のようなもので、親族ではないけれども、別れて時が経っても懐かしく思うのである。わたしは浙東で十何年か過ごし、南京・東京でも六年過ごしたから、これらはいずれもわたしの故郷である。いまは北京に住んでいて、それで北京がわたしの故郷ということになった。

数日前妻が西単市場へ行って野菜を買って帰り、ナズナを売っていたと言ったので、わたしは浙東のことを思い出した。ナズナは浙東人が春によく食べる野草である。田舎では言うまでもなく、街中でも裏庭のある家なら好きな時に採って食べる。婦人子どもはそれぞれハサミを一丁と「苗籠」一つを持って、地面に蹲って探す。面白い遊びの仕事である。その時子どもたちは、「ナズナに馬蘭頭〔紺菊の若芽〕、姉ちゃん裏に嫁に行った」と歌う。後になると馬蘭頭は田舎の人が街に売りにくるようになった。しかしナズナはやはり野草であって、自分で取りに行かねばならない。ナズナについては昔からすこぶる風雅な伝説があるが、これはどうやら呉の地方を主とするらしい。『西湖遊覧志』に、「三月三日男女皆ナズナの花を戴く。ことわざに、三春ナズナの花を戴けば、桃李も繁華を羞ず、と。」顧禄の『清嘉録』にも亦云う。「ナズナの花は俗に野菜花と呼ぶ、ことわざに三月三蟻が竈の山に上ると言うのがあるので、三日に家々では野菜花を竈の釜置きに置いて、虫を祓う。明け方には村童の呼売りが絶えない。あるいは婦人が髻に挿してよく目が見えるよう祈るので、俗に目の明るくなる花と云う。」だが浙東人はこうした事をあまり理解しないので、ただ採ってきてお菜にしたり餅と炒めて食べるだけである。

黄花麦果は通称鼠麴草で、キク科の植物、葉は小さく少し丸く互生し、表面に白毛があり、花は黄色、茎の先に群生する。春に若葉を採って、クタクタに搗いて汁を去り、メリケン粉と和えて餅にし、黄花麦果糕と云う。子どもたちにはそれを褒める歌がある。

「黄花麦果はもちもち旨い、

表門閉めて自分で食べよ。

半分だってやるものか、一つ全部を自分で食べよ。」

清明節前後の墓参りの時、いくつかの家——たぶん古風を保存している家では——黄花麦果をお供えにする、だが餅状にはしないで、指先ほどの小粒にしたり、あるいは小指ほどの細ヒモにし、五、六個を一纏めにして、なづけて繭果と言うが、どういう意味か分からない。あるいは蚕がまぶしに上る時の祭りに、こうした食品を使うので、その名があるのか、それも分からない。十二、三の歳に外地に出て外祖の家の墓参りに参加しなくなって以後、繭果を見たことがなく、最近北京に住んでいてやはり、もう黄花麦果の影も見なくなった。日本では「御形」と言って、ナズナとともに春の七草の一つで、やはり採ってお菓子に作る。形は艾餃子のようで、名を「草餅」と言い、春分前後に多くこれを食べる。北京にもあるが、食べてみるとやはり日本風味で、もう子どもの頃の黄花麦果糕ではない。

墓参りの時よく食べるものにもう一つ野草がある。俗に草紫^{むらび}、通称紫雲英である。農民は収穫後に、田んぼにタネを蒔き、肥料とする、蔑視された植物であるが、柔らかい茎を採って茹でて食べると、味はすこぶる新鮮で美味しく、豌豆の豆苗に似ている。花は紫紅色、数十畝が続いて途切れず、一面の錦繡は、まるで華美な絨毯を敷いたようで、とても美しい。しかも花びらは蝶のように、あるいはひよこのようで、特に子どもが喜ぶ。時に白色の花があり、疫癘に聞くと伝えられ、とても珍重されるが、なかなか手に入らない。日本の『俳句大辞典』に、「この草もまた蒲公英と共に、頗ぶるフウムリアーナもので子供の時分から親しまれるものである。恐らく女にして紫雲英を摘んだことのないものは有るまい。」*と云う。中国には古来花環はなかったが、紫雲英の花鞠は子どもがよく遊ぶもので、この点はわたしが子どもらに替わって喜ぶところである。浙東の墓参りには鼓吹楽を使うから、少年はいつも楽の音について「墓参りの船に別嬪さん」を見に行くのである。金のない家には鼓吹はないけれども、船の上や篷の窓下にはいつも紫雲英と山躑躅の花束が出してある。これも墓参りの船であることの確実な証拠なのである。（民国十三年二月）

※初出：1924年4月5日『晨报副刊』

* 『新式解説俳句大辞典』 鴻巣楨雨・坂本雪鳥・西村酔夢編 博文館明治四十四年十二月初版。